保育実習が保育職のイメージに与える影響
～実習前と実習後の比較を通して～

室　井　眞紀子　　園　田　　巌

The influence of image of childcare workers through the practicum at daycare center

Makiko Muroi　　Iwao Sonoda

要旨：
今回の調査では、学生の保育職に対する職業イメージの意識について調査を行い、それを踏まえ実習指導の視点をあぶりだすことを目的とした。実習指導のポイントとして、①「学生の実態に即した授業「保育職」の正しい情報や実態を学生に伝え、実習への不安や固定観念を取り除くこと、②実習施設との連携、③保育士の社会的役割、④魅力やりがいの伝達、⑤協同的な学びの５点を抽出することができた。また、今後の展開としては、保育実習で得た保育職の職業イメージがその先のキャリア選択に与える影響を縦断的に検討することである。

キーワード：
保育実習　保育実習指導　職業イメージ　保育士としての職業選択

Ⅰ．背景・目的

本研究の目的は、学生の保育職に対する意識を調査し、充実した保育実習指導の視点を見出し、よりよい職業イメージにつなげていくための保育実習指導のあり方を検討することである。これまで、保育実習と保育実習指導とを関連させた研究は多いが、保育実習と保育実習指導に職業イメージを関連させた研究はそれほど多くはない。

近年、日本では出生率の著しい低下がみられ、政府の予想より速いペースで少子化が進行している。その一方で、女性の社会進出が進み、働く女性が増加しているため、保育所の利用率が上昇し、保育所不足による待機児童問題や保育士不足を引き起こしている。

特に保育士不足は深刻であり、新しい保育所を開設したものの、予定する保育士の人数が確保できず開所できないケースも見られる。このような事態を改善するため、厚生労働省は平成27年に「保育士確保プラン」（厚生労働省, 2015）を発表し、①人材育成、②就業継続支援、③再就職支援、④働く職場の環境改善の「4本の柱」を打ち出した。この柱の「人材育成」では、保育士養成施設で実施する学生に対する保育所への就職促進の支援が掲げられている。内容は以下の通りである。

「保育士確保策の一つとして、指定保育士養成施設を卒業予定の学生に対する保育所・児童福祉施設等への就職を促すための取組（リアリティショックに対応するための特別講座の開講、現役保育士であるOB・OGとの交流会、保育所等就職説明会の定期開催等）を積極的に行っている養成施設に対し、当該取組の結果、

保育所・児童福祉施設等に勤務することとなった学生の割合（保育所等の就職内定率）が、対前年度保育所等内定率の全国平均値から増加した割合に応じ、就職促進のための費用を助成することで新卒者の保育所等への就職促進を図る。」

この背景には保育者養成校に入学し資格を取得したものの、保育所に就職しない学生が多くいる実態がある。平成26年厚生労働省「保育人材確保のための『魅力ある職場づくり』に向けて」（厚生労働省, 2014）の資料によると、保育士養成施設にて保育士資格を取得し卒業した学生のうち、保育所に就職したのは51.7%であり、指定保育士養成施設の卒業生のうち、約半数は保育所以外に就職していることが明らかとなっている。これにはいくつかの要因が考えられるが、その1つに社会の保育職に対するマイナスイメージが関係していると思われる。平成30年に行われた東京都保育士実態調査では、現役保育士が就業前に抱いていた保育職に対するイメージは、「勤務時間の長さ」「給与の低さ」「体力面のきつさ」が9割を超えていることが明らかとなっている。これは、社会一般の保育職へのイメージとも重なると言え、学生が抱く保育職に対するイメ―ジや職業選択にも大きく影響しているのではないだろうか。特に、実習前の学生は、実際の保育現場を体験していないため、保育職に対するイメージが漠然としており、周囲からの情報に左右されやすいと考えられる。そのような漠然とした保育職へのイメージが具体化していく唯一の場が保育実習である。保育実習は学生が初めて現場を体験する機会であり、実習を通して保育士の仕事内容や社会的役割を理解し、保育職へのイメージを形成していく（浅井, 2019）。松永ら（2019）の調査では、保育所での実体験が保育観に変化を与えたこと、保育実習での現実認識の深まりが保育士への志望動機にも変化を及ぼしたことを明らかにしている。これらより、保育士という職業を選択するか否かに関しては、保育実習での経験により確立される職業イメージが及ぼす影響が大きいと言えるだろう。故に、保育実習が学生にとり有意義なものとなるためには、保育実習指導を充実させていくことが重要であると考える。

尚、本研究は今後の研究展開に向けた基礎的な調査である。

Ⅱ．調査方法

1. 調査目的

保育所実習での経験が、学生の保育士像や保育職のイメージに対してどのような変化や影響をもたらすのかを調査する。

2. 調査時期

第1回　実習前　2021年6月3日
第2回　実習後　2021年7月8日

3. 調査対象者

A大学 「保育実習指導(1)」を受講の3年生　106名

4. 調査方法

保育実習指導(1)の履修者を対象に、保育実習指導(1)の授業内で保育実習前と保育実習後の2回、Googleフォームを使用したアンケート調査を実施した。（アンケートへの回答は任意である。）

5. 分析方法

グーグルフォームにてアンケートを行い、そ

の結果をグーグルフォームスプレッドシートを用いて集計し、データ分析を行った。自由記述については、記述の意味のまとまりによって段落に分け、KJ 法的分析により内容の分類を行い、質的な分析を行った。

6. 調査内容

職業選択に関する質問、保育士の職業イメージ、保育士に必要な資質に関する質問を主な柱として質問項目を作成した。

7. 倫理的配慮

調査対象者がアンケート調査に回答する前に、回答は本研究のみで使用すること、自由意志および無記名によること、個人のプライバシーを特定される項目はないこと、ならびに本研究の目的と内容を口頭にて説明した。回答をもって調査対象者の同意を得たものとした。

Ⅲ. 結果

1. 職業選択について

(1) 入学時の希望職種

入学時、「保育士」が学生の希望職種であったかどうかについて質問を行った。結果を図 1 に示す。

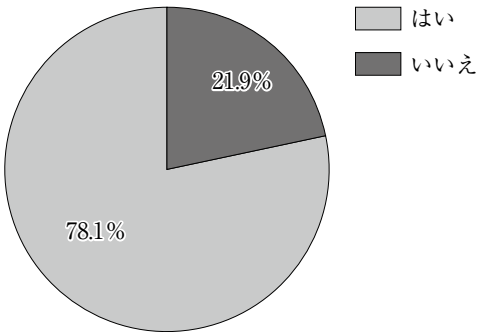

図 1　入学時の希望職種

「保育士」を希望職種とした学生は 78%と高い割合を示した。これより、多くの学生が「保育士」の資格取得を目指し入学をしていることが明らかとなった。一方、入学時より保育士以外の職種を考えている学生が約 20%いることが明らかとなった。

(2) 入学後の希望職種

入学後（実習未実施）、「保育士」が希望職種であるかどうかについて質問を行った。結果を図 2 に示す。

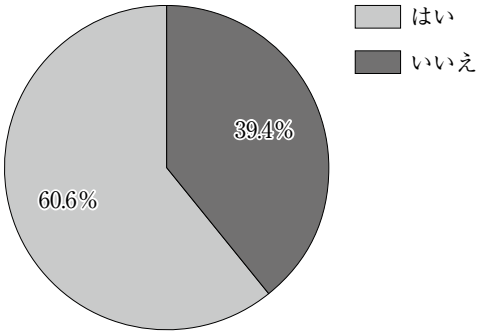

図 2　入学後の希望職種（実習未実施）

「はい」と回答した学生は 60.6%、「いいえ」と回答した学生は 34.9%であった。

入学時の割合と比較すると、入学後は「希望職種」であると回答した学生が約 18%減少していることが分かった。保育職を目指し入学したが、入学後、何らかの要因により志に変化が生じたことを理解できた。

「いいえ」（希望職種でない）の理由について自由記述にて回答を求め KJ 法的分析により内容の分類を行った。結果を表 1 に示す。

「職業イメージに関係するもの」と「それ以外のもの」の 2 つの大項目に分類した。また、職業イメージに関わる回答 17 件を分析した結果、「自分の能力との乖離」「保育所の職場環

表１　希望職種でない理由（実習未実施）

大項目	小項目
職業イメージに関係するもの（17）	自分の能力と適性の乖離（5）
	保育所の職場環境・職務内容のイメージ（12）
それ以外のもの（21）	進路に関係するもの（15）
	その他（6）

境・職務内容のイメージ」の２つの小項目に分類した。回答の多くは保育所の職場環境や職務内容に対するイメージが多いことより、講義内容や周囲の情報が学生の保育職へのイメージに影響していると理解できた。「それ以外」では、「進路に関わるもの」が多く、「迷っている。」「悩んでいる。」「まだ決まっていない。」「まだ何になりたいか分からない。」のように、将来のキャリアプランを描けていないことが分かった。

2. 保育実習後の希望職種

保育実習後、「保育士」が希望職種であるかどうかについて質問を行った。結果を図３に示す。

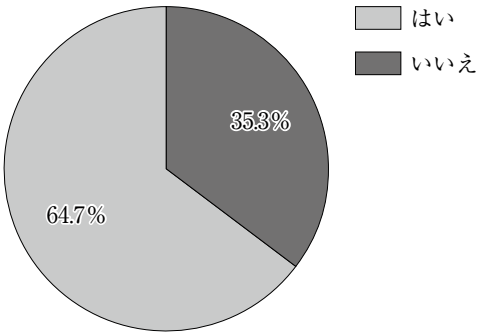

図３　実習後の希望職種

「はい」と回答した学生は64.7%、「いいえ」と回答した学生は36.3%であった。実習前と比較すると、「希望職種である」と回答する学生が４%と誤差の範囲ではあるが若干増加していることが分かった。

以上のことから、実習での体験が学生の職業イメージに何らかの影響を与えていることが理解できた。

次に、「いいえ」の理由について自由記述にて回答を求め、KJ 法的分析により内容の分類を行った。その結果、実習前と同じカテゴリーに分類することができた。結果を表２に示す。

「イメージに関係するもの」では職場環境や職務内容に対する回答が実習後、減少していることが分かった。実習を体験し、保育現場の正しい実態を理解することで職業イメージに変化を来すことが理解できた。

一方、「進路に関係するもの」は実習前後で大きな変化はないことが分かった。実習においてよほど印象に残る体験がない限り、希望職種を含め自身の進路選択には影響しないことが理解できた。

次に、「はい」の理由について自由記述にて回答を求め、KJ 法的分析により内容の分類を行った。結果を図４に示す。

多くの項目がおおむね10%～20%であったが、その中で「楽しさ」は唯一20%を超えており、実習が学生にとって有意義な体験となることが、職業イメージに影響すると理解できた。また、「保育所保育の特徴」「保育に対する魅力」「子どもの成長に携わる」など実体験に基づくイメージに関する項目は15%以上と総

表２　希望職種でない理由（実習後）

大項目	小項目
職業イメージに関係するもの（11）	自分の能力と適性の乖離（4）
	保育所の職場環境・職務内容のイメージ（7）
それ以外のもの（18）	進路に関係するもの（14）
	その他（4）

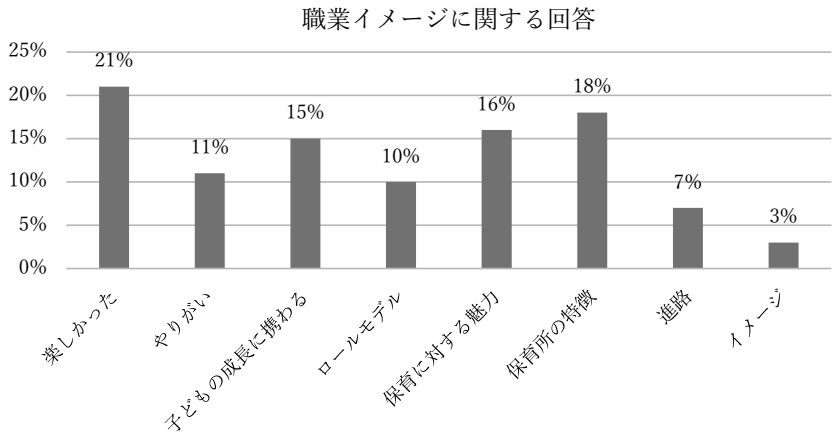

図４　希望職種である理由

じて高く、実習での直接的な体験が学生の職業イメージを形成していくことが示された。

以上のことから、実習での具体的な体験が学生の職業イメージに影響していることが理解できた。

3. 保育職の職業イメージについて

実習前後で「保育職の職業イメージ」がどのように変化したかについて質問を行った。結果を図５と図６に示す。

「③子どもの成長を支える」が実習前、実習後共に21％で最も高い結果となった。

また、「①やりがい」「②保護者を支える」「⑦社会的に重要な仕事」など保育実践に関係する項目はいずれも実習後に割合が増加していることが分かった。一方、「⑥賃金が低い」は実習後、約17％と大きく減少し、「⑤残業が多い」「⑨責任が重い」など労働条件に関する項目も実習後に割合が減少していることが分かった。

以上のことから、実習を経験することで労働条件ではなく、保育職の仕事内容に目が向くようになったことで、保育職のやりがいや魅力に気付き、職業イメージが変化したと理解できる。

4.「保育士」として必要とされる資質・能力について

実習前後で「保育士」として必要とされる資質・能力に対する認識がどのように変化したかについて質問を行った。結果を図７と図８に示す。

回答数に違いがあるため、単純に比較することはできないが、実習前後で保育者として必要な資質・能力の認識に大きな変化はないことが分かった。

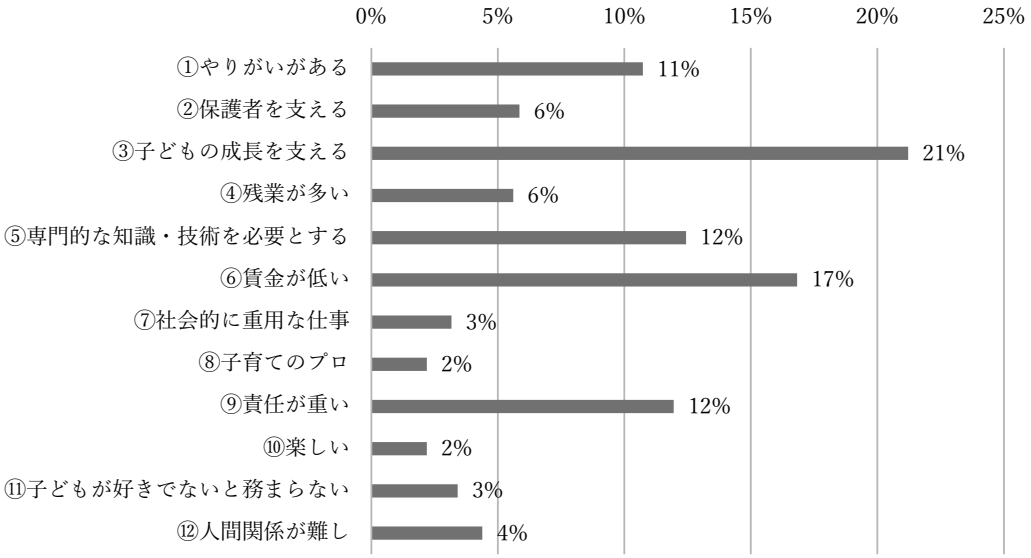

図５　保育職の職業イメージ（実習前）　　回答総数 410

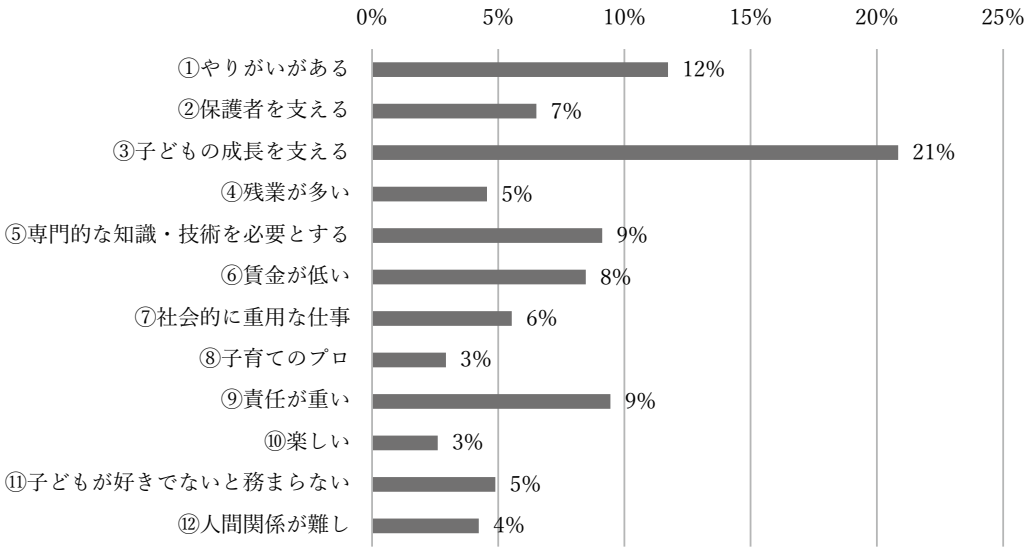

図６　保育職の職業イメージ（実習後）　　回答総数 307

一部の学生は「②子どもを理解する力」③向上心・意欲」「④熱意」「⑤健康・体力」「⑩ピアノが弾ける」「⑪文書作成能力」「⑬遊びのスキル」「⑭コミュニケーション能力」などの個人的資質やスキルが求められていると認識していることが理解できた。特に、「②子どもを理解する力」は実習前、実習後共に突出して高い割合を示している。これは、求められる個人的資質やスキルとして特に必要な能力として学生が重きを置いていることが分かる。

以上のことから、学生は保育士として求められる資質・能力として、集団で要求されるスキ

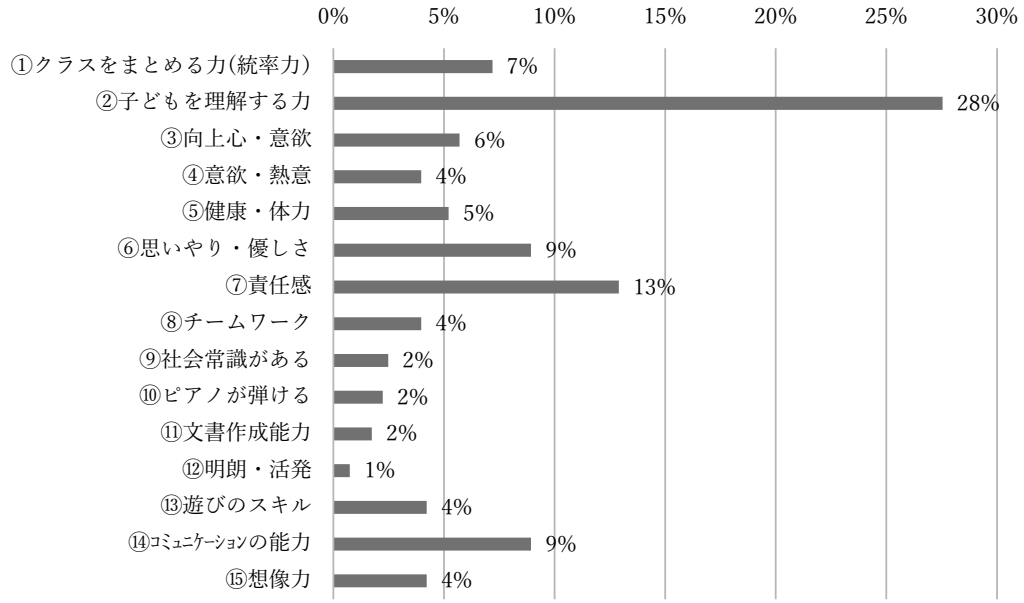

図７「保育士」として必要とされる資質・能力の認識（実習前）　回答総数 403

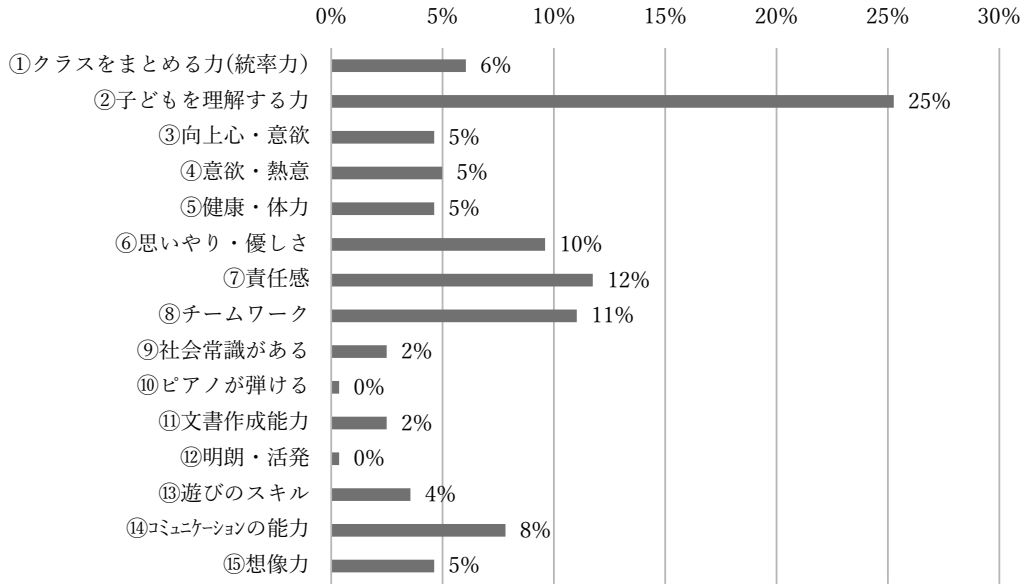

図８「保育士」として必要とされる資質・能力の認識（実習後）　回答総数 281

ルより個人で要求されるスキルの方が求められると認識していることが理解できた。

Ⅳ．考察

以上の結果から授業に必要な視点を導き出すためには、1. 保育職に対する意識の変化、

2. 保育職の職業イメージからの考察、3.「保育士」として必要とされる資質・能力の理解から考察する必要性が示された。したがって、これら3点の着眼点をもとに考察を進めることとする。

1. 保育職に対する意識の変化

入学後に保育士が希望職種であると回答した学生の割合が大幅に減少した。実習後にはその割合が若干増加したものの入学時に比べて低い結果となっている。ここでは先ず、希望しないと回答した理由について分析したものを項目ごとに考察する。

最初に、「自分の能力と適性の乖離」の回答をみると、実習前は「合わない」「自分にはできない」「自信がない」「自分には難しい」「向いていない」などがある。入学時は、保育士は「子どものお世話をする」「子どもと一緒に遊ぶ」という職業イメージを持っていたが、専門科目や実技科目を受講するなかで保育士に求められる専門性が見え始め、入学前に抱いていた保育職に対するイメージが変化したと考えられる。実習後の回答は「なんとなく違う気がする」「自分にできるかどうか不安になった」「子どもと関わることは好きだが責任が重い職業だととても感じ、自分は責任を負えるほどの人間ではないと思った」「いざとなった際にヒトのことを第一に行動できる気がしない」「自分には向いていない仕事」などである。これらの意見は学生の自信喪失を表しているとも受け取れるが、実習自体の満足度が影響したことも考えられる。

また、実習後は保育職に対する単なるイメージによる判断ではなく、保育所実習を経験することでより具体的な職務内容や責任を理解し、自身の能力と照らし合わせながら適性を判断していると理解できる。

次に、「保育所の職場環境・職務内容のイメージ」の回答を見ると、実習前は「責任が重い」「拘束時間が長い」「業務内容と給与が見合っていない」となっている。実習前の保育職への職業イメージとして、保育所の職務内容について不安を抱いている学生が多いと言える。これは、大学での授業の影響というよりも、保育職に対する社会のネガティブな職業イメージの影響を受けていると考えられた。一方、実習後も「給与が低い」「責任が重すぎる」「労働時間が長い」「忙し過ぎる」「魅力を感じない」と同様の回答内容が散見された。これは、実習において「忙しさ」「労働時間の長さ」「責任」といった保育職の大変さばかりがイメージとして残り、それらを打ち消すだけの保育職の良さや魅力を保育所実習にて感じることができなかったと推察される。

さらに、「職業イメージに関係しないもの」の項目内容を見ると、実習前・実習後共に「進路に関係するもの」が殆どであった。具体的な内容としては、実習前は、「まだ進路が決まっていない」「何になりたいか分からない」「考え中」「公務員になろうと思っている」などがあり、実習後は「まだわからない」「決めかねている」「企業への就職を考えている」「他の職業と比較して考える」などであった。

これらの意識を抱いた要因として、実習前の学生は、保育職の具体的なイメージを持つことが難しいこと、また入学後の学生生活において新たな社会経験により世界が広がり、入学時の将来像に変化や迷いが生じていたと考えられた。しかし、実習後も類似した回答内容であることを考えると、実習を体験して将来の職業を強く意識するまでには至らず、今回の実習が保育職を希望するまでの背中を押される経験とは

ならなかったことが推察された。このことは、坪井（2017）が「キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題」の中で、保育士を目指していない学生にとっては、実習にやりがいを感じる割合が少ないと述べていることと一致する。そもそも保育者になる動機付けが不明瞭で目的意識が曖昧な学生については、実習で余程印象的な出来事に出会わなければ、保育職が希望職種となることは難しいと言うことであろう。

その他は「幼稚園教諭の方が向いている」「幼稚園の方がいいと思った」「どちらかというと幼稚園の先生になりたいと思った」との回答であった。これは、当該学生は2年生の後期に5日間の幼稚園教育実習を行っており、幼稚園の職業イメージは保育所の職業イメージではないが関連する部分も多い。故に幼稚園実習での経験が保育所の職業イメージを判断する材料の1つとなっていると言えるのではないだろうか。

最後に、「希望職種である」と回答した学生は実習後に若干増加していた（図2・図3）。具体的な内容としては、「成長を見守ることができる仕事だと感じたから」「大変なことも知ったが、それに勝るくらいの楽しさややりがいも知ることができたから」「実際に現場で働く先生方を見て、学びになることが多く、理想の保育者像を持つことができたから」「子どもと保育者の関わりから生まれる信頼関係にあこがれを持つことが出来たため」「保育をすることの魅力に気付き、子どもと関わることが楽しかったから」などである。これらの回答の分析より、特徴的な傾向は見られないものの「子どもに接することや子どもの成長を感じる喜びや楽しさ」「保育という仕事に対する魅力ややりがい」「保育士に対する憧れ」など多くの学生が職場風土も含めた保育現場に対する好印象をもっている様子が伺える。実習にてこのようなポジティブな経験や体験をした学生は保育職という道を選択しやすい傾向にあることが理解できた。

また、実習前は「楽しい」「子どもと遊ぶ」という表面的な理解に基づく保育職のイメージであったが、実習での経験を通して「子どもの成長を支える」こと、そのために指導計画を立案し、記録を取り、話し合い、環境構成を考えるなど、実践の裏には細かな準備や教育的意図、配慮があることが分かり、保育職の職業を具体的に理解し、そのことが専門職という職業イメージへの変化に繋がっていると考えられた。また、そこに保育職のやりがいや魅力を感じたのではないだろうか。

以上、「保育職に対する意識の変化」からの考察より、実習指導に活かす視点として以下が導き出された。

① 学生の実態に即した実習指導

保育所の職務内容について不安を抱いている学生が多いことより、学生が何に不安を抱いているのかを調べ、理解した上で、実習授業では保育職の正しい情報や実態を学生に伝え、実習への不安や固定観念を取り除いていく必要があると考えられる。また、保育職への希望意欲が高い学生ばかりでなく、その動機が学習意欲にも影響を与えていることより（増田, 2020）、学びや実習への意欲を高める配慮が必要である。特に、実習については、目標を持たせる実習指導が保育実習経験の効果を高めることに繋がるため（前田, 2017）、個々の学生の心に寄り添い、実習で何を学びたいのか等、目標を明確化していけるよう指導をしていくことも大切である。具体的には以下の方法が考えられる。

・保育現場をイメージできるよう保育士を招き、現場の話を聞く機会を積極的に設定する。
・保育所の様子やそこで生活する子どもの様子

がよく理解できるような映像を視聴し話し合う。

・模擬授業やロールプレイを行うなどアクティブラーニングを取り入れる。

また、実習が学生にとり満足度の高いものとなるよう、学生の実態や意識を実習園と共有し、実習にて自信を失った学生には、それをどのように回復するかに主眼をおき、事後指導を丁寧に行っていく視点も必要であろう。

② 実習施設との連携

学びの連続性を意識した養成校と実習施設との連携の視点も重要である。この点について、浅井（2018）は、養成校と実習施設が連携し、学生の現状と課題を共有することが、保育所実習での学生の学びを大きなものとすると述べている。そのため、保育所実習は学生が保育職のイメージを形成する上で重要な機会となることを実習施設にも伝え、養成校と実習施設が両輪となり学生の実習指導を行うことも必要であると考えられる。また、重労働、大変さ以外の保育職の魅力を学生が見出すことができるよう実習施設との連携を行い、保育現場に触れる機会を増やす、保育士の話を聞く機会を設けるなど、授業内容や実習指導を工夫していく必要があるだろう。

2. 保育職の職業イメージからの考察

全体的な傾向としては、「賃金が低い」を除いては実習前後での保育職に対するイメージに大きな変化は見られなかった。これは、実習指導の授業や他の専門科目の様々な学びから、学生が実習に行く前にある程度、保育職への総合的なイメージが構築されていたと理解できる。この点については現在の授業のあり方で良いということが示されたと言えるのではないだろうか。

「賃金が低い」については、実習前後で大きな違いがあり、実習前に比べ実習後の割合が約2倍になっている。これについて、実習後の自由記述の回答では、「労働時間が長い」「忙しすぎる」「気が休まるタイミングがない」など、労働条件についての内容が殆どであった。これらを踏まえると「賃金の低さ」というより、労働量と比較して割に合わない、つまり労働対価が低い仕事であると学生が判断したと考えられる。平成30年度東京都保育士実態調査報告書において、現職保育士に保育職の就業前後の職業イメージを調査したところ、92%の保育士が「給与が低い」と回答し、他にも89%の保育士が、「体力面がきつい」と答えており、「保育以外の業務が多い」に関しても90.9%であった。これより、現職の保育士も「労働対価」が低いと感じていることが明確になっており、今回の調査で明らかとなった学生の理解は、的を射ていたと言えよう。

他の項目に関しては実習前後に大きな変化はないが、特徴的なのは実習前後共に「子どもの成長を支える」が突出して高い割合を示している点である。このことは、保育士の仕事が、子どもと共に生活しながら子どもの発達を見守り、そして援助するという営みであり、愛情豊かに子どもと接する保護者や母親の役割に近いというイメージを抱いていることを示しているのではないだろうか。

以上、「保育職の職業イメージ」からの考察より、実習指導に活かす視点として以下の点が導き出された。

① 保育士の社会的役割について

学生は、保育職に対して「賃金が安い」「残業が多い」「責任が重い」という職業イメージを抱いている傾向がみられ、このようなネガティブなイメージは保育職を選択しない要因と

もなり得る。しかし、賃金や労働環境に関することは養成校単独で改善できることではなく、実習指導の授業に反映することは難しい。養成校としてできることは、未来を担う幼児の人格形成と養護という社会の中で重要な仕事であること、そして人間を育てる仕事の素晴らしさを十分に伝えるような授業を考えていく必要がある。

また、「責任」や「残業」は保育職に限ったことではなく、社会的役割のある仕事には必ず要求される。そのため、実習指導では、職業の社会的責任とは何かについても学生に伝えていく必要があろう。この点については今後、具体的にどのような責任が重いと感じているのかについて調査を行う必要があり、そのうえで学生の負担や不安材料を明らかにしながら、授業に反映させていくことが重要である。

② 魅力ややりがいの伝達

労働条件だけではなく、「やりがいがある」「子どもの成長を支える」「楽しい」という良い職業イメージも持ち合わせていることが示された。特に実習後は、「楽しい」「子どもの成長を見守り支えることができることへの憧れを感じた」「やりがいを強く感じた」など保育職の「楽しさ」や「保育に対する魅力」を感じていることが分かった。厚生労働省（2013）は、「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」の発表の中で、保育士養成施設に対して、学生に保育の魅力を伝えるための取り組みを行うことの重要性を示している。今後の実習指導では、現役保育者の話を聞く機会を設けたり、グループワークにて保育職の良さや魅力について調べたりするなど、学生が保育の魅力をより感じることができるよう、実践的な授業を展開していく必要がある。また、事後指導では実習で気付いた保育職の良さや魅力をプレゼンテーションすることやポートフォリオを作成し互いに見せ合うことなど各々の体験を共有できる機会を設け、良い職業イメージに繋げられるよう丁寧な指導を行っていくことも大切であろう。

3.「保育士」として必要とされる資質・能力の理解

保育士として必要とされる資質・能力に関しては、実習前・実習後共に「子どもを理解する力」が高い割合となっている。保育を行っていく上で、子どもを理解することは保育の要であり、換言すれば、子どもの発達の実態を把握し、一人一人の子どもの発達特性や課題を理解することが基本にあり、そのプロセスの中で初めて個々の子どもに沿った援助や指導を行うことが可能となる。また、「子どもを理解する力」は保育実習のみならず、保育現場で仕事をしていく上で大切な能力となることは言うまでもない。実習では、実際に子どもと関わり、そして援助する保育士の姿を観察することを通して、その必要性や重要性を実感したと言えるのではないだろうか。

次に、「チームワーク」の割合が実習後、大幅に増加している。子どもの命を守り、子どもの安定的情緒の確立や子どもが安心して保育所生活を送れるよう、保育者は常に情報交換を行い、声を掛け合い、保育を行っている。保育はチームワークなしには成立しないことを実習での体験で身をもって理解し、保育士として必要不可欠な能力であると認識したと考えられる。

「思いやり・優しさ」「責任感」も高い割合を示している。このことは、「チームワーク」とも強く関係する能力であり、チームの一員として保育を行っていくための重要な要素として、認識した結果であると考えられる。

さらに、全体を見ると実習後は「向上心・意

欲」「熱意」「健康・体力」「社会常識がある」「明朗・活発」「遊びのスキル」「コミュニケーション能力」「ピアノが弾ける」「文書作成能力」など個人的な資質・能力より、「思いやり・優しさ」「責任感」「チームワーク」など集団で必要とされる資質や能力の方が総じて高い割合を示していた。実習での体験より、保育士として仕事をしていく為には、他者と共に仕事を進めていく社会性や協調性などの能力がより求められることを認識したと考えられる。

以上、「保育士として必要とされる資質・能力の理解」から」の考察より、実習指導に活かす視点として以下が導き出された。

① 協同的な学び

子どもを理解するには、目の前の子どもの言動や行動を育ちの過程をも含め記録し読み取っていく力も求められる。実習指導では記述力、文章作成力が身に付くよう、日誌の書き方やエピソード記録の記述方法も丁寧に指導していく必要がある。また、DVD など視覚教材を用いて子どもの言動や行動を記録し、その意味や捉え方についてグループで共有することや、ロールプレイを行い子どもの視点、保育者の視点を理解することなど体験に基づく授業を行い、学生が子どもを理解する力を得られるよう工夫をしていくことも重要である。さらに、目的に向かい他者と協力する楽しさや充実感などを体験し、その必要性を理解できるよう、グループワークやチームで取り組む協同作業を取り入れた学習形態を模索する必要もあろう。

Ⅴ．結論

今回の調査では、学生の保育職に対する職業イメージの意識から実習指導に必要な視点を考察した。実習指導のポイントとして以下の５点を抽出した。

① 学生の実態に即した授業
② 実習施設との連携
③ 保育士の社会的役割
④ 魅力ややりがいの伝達
⑤ 協同的な学び

保育所実習での経験は学生が職業イメージを形成する唯一の場である。しかし、実習での体験のみが職業イメージを形成するわけではなく、実習事前指導、実習、実習事後指導、という一連のプロセスの中で形成されていくものである。従って、今回、抽出された視点をどの段階の授業においても反映させ、実習が有意義、且つ充実したものとなるよう意識していくことが求められる。

一方、養成校の役割はより良い実習指導を行うことがゴールではない。目指しているものは、学生が将来保育職を選び、専門職としてキャリアを積み重ね保育現場で活躍することである。従って、学生にとっては保育実習がその先の保育士としてのキャリアのスタートであると認識しなければならない。その意味で、今後の展開としては、保育実習の経験よる職業イメージがその先のキャリア選択に与える影響を縦断的に検討することである。

引用・参考文献

浅井拓久也（2018）専門職としての保育士像の形成に関する研究―保育所実習前後における保育士像の変化に着目して―，秋草学園短期大学 紀要 35 号，pp14-28

浅井拓久也（2019）保育士像と保育士としての職業選択の関係―保育実習Ⅰを通して形成される学生の保育士像に着目して―，秋草学園短期大学 紀要 36 号，pp38-50

東京都保育士実態調査 結果の概要〈中間のまとめ〉平成 30 年　https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/30hoikushichousa.files/H3

0chukan.pdf（情報取得日（2021 年 10 月 1 日）
椛島香代・平山許江・松村和子（2007）保育学科学生の実習体験におけるキャリアデザインの構築に関する研究，文京学院大学総合研究所紀要(8)，pp129-148
加藤麻里恵（2009）保育者養成大学在学生における進学動機、就職希望および保育者効力感，保育士養成研究(27)，pp29～36
小畠啓子（2020）保育者養成学科に在籍する大学生の意識調査，環太平洋大学研究紀要(15)，pp.187-192,
厚生労働省職業安定局（2013)「保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者に対する意識調査」 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/0000057898.pdf（2021 年 10 月 21 日）
厚生労働省雇用均等・児童家庭局 職業安定局（2013）「保育を支える 保育士の確保に向けた総合的取組」 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000026218.pdf（2021 年 10 月 21 日）
厚生労働省（2015)「保育士等に関する関係資料」 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/s.1_3.pdf（情報取得 2021 年 10 月 1 日）
厚生労働省（2015)「保育士確保プラン」 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000070942.pdf（情報取得 2021 年 10 月 17 日）
厚生労働省（2014)「保育人材確保のための『魅力ある職場づくり』に向けて」 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/0000057898.pdf（情報取得 2021 年 9 月 10）
前田有秀（2017）保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究―保育者効力感変化に影響を与える事前要因の検討―，尚絅学院大学紀要(73)，pp.42-54
増田翼（2020）保育職への接続・適応に関する先行研究の系譜と課題(1)―保育職志望段階に着目して―，仁愛女子短期大学研究紀要，no.52，pp.63-73
松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子（2019）保育実習が学生の子ども観，保育士観におよぼす影響，鎌倉女子大学紀要 紀要 9 号，pp.23-33
永盛善博（2013）保育者志望の高校生における保育職の理解状況，東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要(3)，pp.53-64
東京都保育士実態調査 結果の概要〈中間のまとめ〉（2018） https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/30hoikushichousa.files/H30chukan.pdf（情報取得日（2021 年 10 月 1 日）
坪井敏純（2017）キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題，鹿児島女子短期大学紀要，第 52 号，pp.97～102